

第4章 再び高度医療を

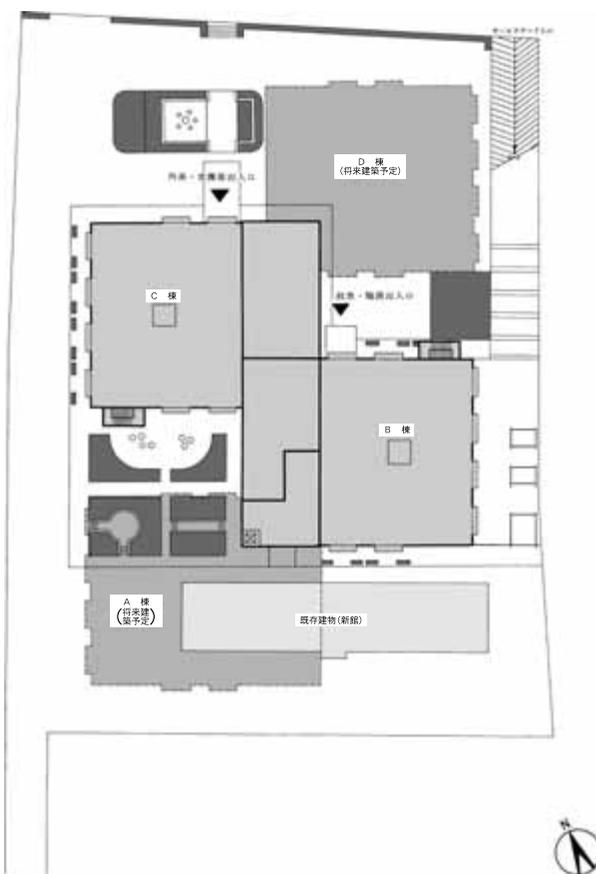
1. 最新の医療病棟建設へ

第1期工事始まる

土地の売却や寄付金による新病棟建設等で息を吹き返した三井厚生病院であったが、それは戦後の復興という意味であり、高度経済成長を続ける日本国内にあっては、未だ病院の規模は完全なものではなかった。

三井厚生病院では白石謙作院長が昭和39年(1964)、膵臓がんのため死去した。

その後、院長不在のまま、東京大学医学部神経科・秋元波瑠夫教授、耳鼻咽喉科・藤田馨一部長の2人が続けて院長代理を務めたが、東京大学と関係の深い三井厚生病院では、同大学からの正式院長赴任を希望する声が高まっていた。戦後以来、職員を2代続けて院長としてきたこともあり、東京大学からの任命赴任のない状況を危惧した三井厚生病院部長会は同大学教授会に陳情した。当時の島蘭順雄医学部長が泉橋慈善病院元院長・島蘭順次郎の子息だったことも幸いし、昭和41年(1966)に東京大学医学部第二外科の木本誠二教授が新院長に就任した。この時、木本院長と三井グループ首脳陣との間には病



昭和43年当時の建替え工事計画

院再建計画が約されており、職員にも新病棟への建替えの機運が高まっていた。

昭和43年(1968)、三井グループ26社からなる「月曜会」(昭和25年(1950)発足。月曜日に例会を行っていることから命名)は資金22億円を各社で分担拠出し、近代的な総合病院への建替えを決定した。第1期工事として新館を残して各旧棟を取り壊し、6,600㎡の敷地に地下1階・地上13階の最新医療病棟2棟を建設し、これをBC棟と呼び、将来的にはA棟・D棟を新築し、4棟を接続する計画とした。

基本設計を担当した東京大学工学部教授の吉武泰水工学博士は設計コンセプトを次のように述べている。

「シティーホスピタルに適応したものとすること。規模としては当初400床位、将来の発展拡張は敷地の容積率から1万坪は建てられることもあって、約650床位を想定し、さらに見合う将来建築の配慮をしておくこと。工事中も既存の診療施設の運営は続けていくこと。設備は病院機能を果たす重要要素として特に重点を置くこと。というような基本的な条件を設定して検討した上で、病院の伝統的パビリオンタイプと新しい有機的ブロックタイプの利点を生かして総合的にまとめました」(『三井記念病院'70』に掲載)

こうして施工は三井建設(現三井住友建設)・鹿島建設共同企業体、実施設計は日本設計事務所が担当した。昭和43年(1968)12月18日に起工式が行われた。

また、建設にあたっては医療活動に支障のないよう、先行工事としてプレハブの仮病棟が建てられ、既存病棟から患者を移転し、空室となったものから順次解体していく工程で工事は進められた。

そして、月曜会は「三井厚生病院拡充計画実行委員会」を設置した。同委員会の世話役となった三井不動産の田口純専務取締役は、「戦後はやむなく病院の敷地の一部を復興資金に充て、応急的な医療を行ってきましたが、これを良い病院に建替えることは懸案でした。それが月曜会加盟会社の賛同を得て、実現の運びとなりました。木本誠二院長も身命を投げ打って病院のために尽くすという身の入れ方で、誠に頼もしくありがたく思っています」と述べている(昭和43年(1968)9月5日付『三友新聞』に掲載)。

第1期工事出資26社(昭和45年10月1日現在、社名は当時のもの)

大阪商船三井船舶	日本製粉	三井石油化学工業
三機工業	北海道炭礦汽船	三井倉庫
昭和飛行機工業	三井銀行	三井造船
ゼネラル石油	三井金属鉱業	三井東圧化学
大正海上火災保険	三井建設	三井農林
東食	三井鉱山	三井物産
トーマン	三井信託銀行	三井不動産
東レ	三井精機工業	三井三池製作所
日本製鋼所	三井生命保険	(社名50音順)

B C棟竣工、東洋一の高層病院に

昭和45年(1970)4月1日、第1期工事の完了と合わせ、三井厚生病院はこれまでの施療機関的な名称を脱し、広く医療に当たる意味を込めて、「社会福祉法人 三井厚生病院」から「社会福祉法人 三井記念病院」に改称した。

4月7日に竣工式、12日に修祓式が行われ、その後は各医療機器の設置や旧棟の各科移転、プレハブ棟の取り壊しが行われ、約半年後の9月28日、開院式が盛大に挙行された。

竣工にあたり、第1期工事出資26社代表の三井不動産・江戸英雄社長は喜びの言葉を次のように述べている。

「当院は太平洋戦争の戦火に遭い、加うるに財閥解体により三井家の資金援助も途絶したため、自力の再建、診療が続けられてきましたが、建物・設備は荒廃・陳腐化し、このまま放置すれば多年の輝かしい伝統と実績を有する当院の存続も危ぶまれる事態となりました。私ども三井系列26社は、この事態を憂慮



江戸英雄社長

し、当院創設の三井家の精神を継承し、共同出資により近代的高層病院を建設、名称を『三井記念病院』と改め、この度の開院の運びとなったことは誠に同慶の至りであります」(『三井記念病院'70』に掲載)

また、木本院長は開院前にあたって次の言葉を述べている。

「問題はこうした豪華な新病棟にふさわしい内容である。そうなると結局は人の問題である。要はその人の能力と熱意にあるのであり、1人で何人分もの仕事をカバーできる人もあれば、半人前どころか、却ってマイナスになる人もあるのが世間の実情である。新病棟移転に伴う無数の案件に決して一挙に解決されるものではなく、かなりの時日の過渡的な漸次(時)的な方式も止むを得ないことはもちろんである。これをどう乗り切るか、どう最終的な体系に移行できるかは、結局先に述べた人の問題に帰着するわけである」(清瀬 闊^{ひろし}『下弦の月 三井記念病院とともに半世紀』に掲載)

新病棟はBC棟からなる地上13階・地下1階の鉄筋コンクリート造りで、延床面積2万1,284㎡、軒高は48.34m、塔屋2階の最高部は56.65m。都心に現れた巨大病院の偉容



「東洋一の高さを誇る高層建築病院」として話題となったBC棟

は当時、香港にある12階建ての「クイーン・エリザベス・ホスピタル」を凌ぐ高さで、「東洋一の高さを誇る高層建築病院」として話題となり、和泉町界隈では、「病院がなくなってホテルができたのか」とも言われた。

また、鉄骨部には高層建築では珍しい新工法「鉄板耐震壁」が採用された。これは地震発生の際、水平力の大半を壁が負担する構造にしたもので、強度・剛性は一般コンクリートの約10倍にもなる。B棟とC棟の間には防煙区画が設けられ、火災が発生した場合でも安全に隣の棟へ避難できるよう設計された。

ベッド数は378床（一般354床、結核24床）だが、大半が低所得者のために保険がきく病室となっており、全てに冷暖房が完備された。横臥した状態からボタンを押せばベッドは自由に傾斜し、新たに酸素吸入装置も導入された。

医療設備も国内唯一を含む最新機器を導入し、コバルト60放射線治療装置や心臓血管撮影装置など大学病院にも勝る機器を揃えた。診療要員も循環器外科の世界的権威である木本院長をはじめ、東京大学医学部を中心とした専門ごとの支援体制を整えた。

また、患者の多い消化器・循環器・呼吸器の三系統の病気についてセンター制を導入したことは全国で初めての試みとなった。これは「病院は生き物である」という木本院長の発案によるもので、センター長を置かず、各診療科部長6人による合議制で運営された。一方、新病棟では慣れないための不便もあり、特に8台あるエレベーターが全て上がってしまい待ちきれず階段を上る人も多かった。

診療科目は内科、健康管理科、神経科、小児科、呼吸器センター、循環器センター、消化器センター、外科、脳神経外科、整形外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科、放射線科、麻酔科のほか、救急部、中央手術部、中央検査部を設けた。新病棟開院時の職員は医師65名、看護婦70名であった。

三井記念病院高等看護学院を開院

B C棟竣工の翌年、三井記念病院は看護婦養成のための「三井記念病院高等看護学院」を開院させる。三井記念病院は三井慈善病院時代から附属の看護婦養成所を設けていたが、戦中・戦後の混乱により、看護婦の養成を休止していた。

看護婦教育にも熱心だった木本誠二院長は、「集まってくる学生、教える先生、実習できる病院の三者が一体とならなければ、いい教育はできない」と関係者を説き、昭和46年(1971)4月、三井記念病院高等看護学院は2年課程・定員30名で開院した。初年度の学院長は羽田野茂副院長が兼務した。戦後に建てられた既存の新棟が校舎に充てられた。

昭和47年(1972)、木本院長の懇望により、山田里津学院長が就任する。山田学院長は日赤看護学校を卒業後、厚生省看護課で看護行政に携わり、千葉県初の看護学校設立にも尽力し、三井記念病院高等看護学院設立時も調査官として同学院を訪れていた。木本院長は、「日本一の看護学校を作りたい。そのために日本一の校長を迎えたい」と要請した。

それまで看護学院は病院の附属機関として病院役員が学院長を務めるのが通例であったが、山田学院長は国内で初めて看護職の学院長となった。

その後、三井記念病院高等看護学院は徐々に規模を拡大し、最盛期には定員200名に



三井記念病院高等看護学院の生徒たち(平成10年卒業アルバムより)

まで達した。平成16年(2004)の閉院までの33年間に卒業した生徒は約1,200名に達し、彼女たちは現在も三井記念病院をはじめ、医療・福祉など幅広い分野で活躍している。

三井建設で血液検査のデータ処理

新病棟完成から5年経った昭和50年頃、三井記念病院は血液検査などの生化学検査のデータ処理の一部を三井建設(現三井住友建設)で行っていた。内科・外科から持ち込まれる血液検査量は1カ月に約8万件に及び、病院のコンピューターだけでは対応できなかったため、近隣の神田岩本町に本社のある三井建設の協力を得て、空き時間に同社のコンピューターを借りてデータ処理していた。当時の中央検査部・清瀬 闊^{ひろし} 部長(後の副院長)はその実情をこう語っている。

「何しろ量が量ですから、大変な仕事なんです。ミニ・コンピューターを導入したんですが、それでもおっつかない。そんな訳で三井建設さんのコンピューターを使わせてもらっているんです。ミニ・コンにインプットしたもの(紙テープ)を三井建設さんに持って行き、統計用のもの(磁気テープ)と報告書が作成されます。理想を言えば、電話回線で建設さんのコンピューターと接続できるようになればいいんですが、資金的に無理なようです」(昭和50年(1975)2月13日付『三友新聞』に掲載)

ちなみに2年後の昭和52年(1977)、三井建設と三井記念病院はマイクロコンピューターを利用したオンライン自動化臨床検査システム「TELAAS」を共同で開発。検査結果のデータ分析から検査報告書作成までをオンライン化した。

2. 第2期工事に向けて

三井グループ50社からの寄付

第1期工事のBC棟完成から6年後の昭和51年(1976)、新たにD棟を建設する第2

期工事開始のための寄付活動がグループ内で始まった。まず、三井銀行(現三井住友銀行)と三井物産は同年で創立100周年を迎えたことを記念して三井記念病院に5億円ずつ10億円を寄付した。これに伴い三井グループの社長会である「二木会」(昭和36年(1961)発足。第2木曜日に例会を行っていることから命名)23社のうち、銀行・物産を除く21社でも総額6億円を拠出した。

続いて大正海上火災保険(現三井住友海上火災保険)も昭和53年(1978)に創立60周年を迎えるのを記念して向こう3年間にわたって毎年5,000万円ずつ、合計1億5,000万円を寄付すると発表した。こうして第2期工事に向けた寄付金は集まり、昭和52年(1977)6月には三井不動産の中井武彦専務取締役を委員長とする「三井記念病院建設委員会」が設置された。寄付金は二木会以外の三井グループ各社からも寄せられ、最終的には50社から20億円に達した。

第2期工事出資50社(昭和55年4月1日現在、社名は当時のもの)

大阪商船三井船舶	東レ・エンジニアリング	三井航空サービス
王子製紙	西日本電線	三井コークス工業
三機工業	日本製鋼所	三井鉱山
昭和飛行機工業	日本製粉	三井鉱山コークス工業
ゼネラル石油	日本ユニバック	三井コンクリート工業
大正海上火災保険	藤倉電線	三井情報開発
ダイセル化学工業	三井アルミナ製造	三井信託銀行
台糖	三井アルミニウム工業	三井精機工業
電気化学工業	三井海洋開発	三井製糖
東京芝浦電気	三井共同建設コンサルタント	三井生命保険
東食	三井銀行	三井石油開発
トーメン	三井金属鉱業	三井石油化学工業
東洋エンジニアリング	三井軽金属加工	三井倉庫
東レ	三井建設	三井造船

三井東圧化学

三井不動産

三井リース事業

三井農林

三井不動産建設

三越

三井物産

三井三池製作所

(社名50音順)

D棟に看護学院を併設

昭和53年(1978)7月20日、D棟建設の起工式が行われた。総工費約20億円、施工は三井建設(現三井住友建設)・鹿島建設共同企業体が行うこととなった。当初の計画ではB C棟に続くD棟は13階建ての予定だったが、建築基準法の改正などにより、B C棟と同規模の病棟は建てられず、A・B・C・Dの4棟連結の構成からなる建設計画は見直さざるを得なかった。このため、A棟の建設は断念された。D棟は見直し、4階建ての予定としたが、病院の患者数増加などの理由から7階建てに計画変更され、合わせてB C棟の改修も行われることになった。翌昭和54年(1979)9月に上棟式を執り行い、昭和55年(1980)4月7日に竣工した。



看護学院を併設したD棟

完成したD棟は地下2階・地上7階、延床面積は5,983㎡。B C棟から薬局、人間ドック室、人口透析室、放射線室が移転したほか、手術室が増設され、さらにB棟とは各階で繋がれた。また、D棟の5階を1クラス40名収容できる看護学院とした。

竣工式には^{はすみしん}荷見晋評議員副会長をはじめ、木本誠二名誉院長、羽田野茂院長、理事を務める三井不動産・江戸英雄会長、坪井東社長、三井銀行(現三井住友銀行)・小山五郎会長、三井信託銀行(現中央三井信託銀行)・生野専吉取締役相談役など三井グループ首脳陣が出席した。

羽田野院長は挨拶で次のように述べている。

「本日の4月7日という日は61年前、皇后陛下に行啓賜った記念の日でもあ

ります。また、10年前の4月7日にはBC棟が完成しており、その意味で今日は非常に当病院にとっておめでたい日であります。その日にD棟の完成とBC棟の改修を終え、救急患者の収容も便利になりました。看護学院では現在の看護婦不足解消のお役に立てるのではないかと考えております」(昭和55年(1980)4月10日付『三友新聞』に掲載)

さらに昭和58年(1983)には第3期工事として地上8階建ての看護学院棟が竣工し、三井記念病院は最新の医療設備と看護婦育成体制を確立していった。

「三井の天使」を除幕

D棟が完成した昭和55年(1980)、竣工を記念してD棟エントランスホールの中庭に19世紀パリで活躍した宮廷彫刻家・A・ゴーリーの大理石天使像が設置され、同年7月7日に除幕式が盛大に開催された。この天使像は第2期工事完成を記念して三井不動産と三井建設(現三井住友建設)から贈られたもので、元の名を「三天使」といい、中庭の3つの泉の隣に建てられた意味を含めて「三井の天使」と命名された。台座の「三井の天使」は三井不動産・坪井東社長の書によるもので、社長の孫・千香子ちゃん(当時4歳)の手によって、除幕された。



看護学院棟



三井の天使